

# FADO

51

Julho 2006

月田秀子ファド倶楽部

TSUQUIDA HIDEKO FADO CLUBE JOURNAL

## 月田秀子の昨日、今日、明日・・・

東京へ引っ越して5年目の夏がやってこようとしている。ここ品川の港南は、かつては運河と倉庫しかない淋しいところだったと聞いている。が、ここ数年の変わりようは、新参者の私の目にも、驚くばかりだ。駅周辺には高層ビルが立ち並び、海岸べりには高層マンションがニョキニョキと背比べ。

かつては、我が家のリビングから、そんなビルの合間に、芝浦下水処理場の緑、JR・京急の電車の行き交う光景、その向こうに六本木ヒルズのビル群が望めたのだが、その空間を埋め尽くすように、巨大ビルが建ちつつある。お蔭で我が家からは、空を見ることができなくなってしまった。中庭に面した寝室と仕事部屋は大きなすりガラス、窓は斜めにしか開かない。晴れているやら曇りやら、果ては雨が降っているや否や、家を出ないとわからない。まるで「天上人」である。なのに天が見えない。いや、ひょっとしたら天上人には天はなく、眼下に下界が広がっているのが見えるだけなのかもしれない。

リスボンに住んでいた頃、あの飛びっきり青い空と、彼方に大西洋を臨むテージョ河が見たくて、よく近くのサンタカタリーナ展望台、時間のあるときは、丘の上のサンジョルジュ城にたずんだものだ。たとえ日の射さないところに住んでいても、リスボンの街から見える空は、誰にも平等にあの澄んだ青い瞳を開いていてくれる。そう思うだけで心が弾んでいったのを思い出す。

天王洲にあるブルーレ極力行くようにしている。どうしようもなく腰が上がりなるときもあるが、体が重たい時、心が沈んでいる時は、特にエイッとばかりに行くようにしている。品川の運河沿いの公園を歩いて20分足らず、ほとんど人気のない道を、かつては自転車を走らせた道を、歩いている。なるべく舗装されていない土の道を選びながら。

最近、公園沿いの道が新しくなった。10cm×20cm位の大きさの長方形の黒っぽい石が敷き詰められたのだが、その隙間を埋めているのは、なんと白い海の砂だ。「お前はどこの海からきたの？」吹き溜まりに寄せられた砂をすくい上げて尋ねてみた。波の音も聞こえない都会の片隅で、悲しそうに砂は指の間からさらさらとこぼれた。

ギターの蓮見昭夫氏に支えられ、歌いつづけている。ギター一本で懸命に盛り上げようとしてくれる蓮見氏には、心から感謝し



## 私たちは忘れない!

大阪・大正区 (井本良子)

私たちは忘れない! 平成18年6月11日を!

大都市大阪の片田舎「大正区」、昭和山のおもとに小さな会館「アゼリア大正」がある。その田舎町にファドの第一人者「月田秀子」の歌声が、哀しく、力強く響き渡った。

午前11時から開幕ぎりぎりまでのリハーサル、ホールの外ではファンの長い列をなす、いつもの情景があった。休憩する間もなく、午後3時、少し遅れての開演。5時30分終幕。その間6時間30分、秀子さんは歌いつづけた。このスタミナはどこにあるのでしょうか? その細かい体のどこに……。

コンサート前に届いた一枚のファックス、「幸いにも与えられた人生の日々を悔いなく燃やしつつゆきたい……。ファンの皆様のご声援に応える為にも精一杯素晴らしいステージを作りたい……。」と。また、「ポルトガルギターなしで、何とか慣れたというか、

ている。けれど、いまだに、ギターや歌の隙間からポルトガルギターの音が聞こえてくるのも事実だ。

四ツ谷の「マヌエル・カーザ・デ・ファド」には、日替わりで、チェロの竹花嬢、バイオリンの平松嬢が応援に駆けつけてくれている。今のところ、「ポルトガルギターがなければファドじゃないよ」という厳しいご批判は私の耳には届いていない。とてもいい感じのライブになりつつあるので大切にしたいと思っている。

それにしても、「マヌエル」は渋谷、四ツ谷とも、毎回満席の盛況をいただいている。その影に、見えない「口コミ」の力があることを忘れてはならない。

先日、ホームページの掲示板に「ポルトガルアートセンター」のクリスティーナ嬢からはじめての投稿があった。それで初めてわかったのだが、「東京でファドを聴ける場所」として「マヌエル」を紹介してくださっていたのだ。

翌日、早速、同センターを訪れ、クリスティーナ嬢にはじめてお会いした。お父君が日本の建築家、お母君がポルトガル人とのこと。12畳ほどしかない部屋に、陶器、タイル等の民芸品、オリーブオイル、缶詰等の食料品に混じって、ポルトガルギター、CDが重なり合うように展示されてある。うっかり動けない。より血の通った文化交流を目指し孤軍奮闘しているその姿に感銘を受けた。そしてもっと早く出会っていたかと思った。これから、私の強い助っ人になってくれそうな気がする。

### \*ポルトガルアートセンター:

東京都港区南青山3-12-12 南青山312ビル204号

(東京メトロ「表参道」から徒歩3分) tel:03-3796-1976

HP: <http://www.bidders.co.jp/pitem/>

5月5日「シャンパーニュ」、6月11日「アゼリア大正」のコンサートでは、思い切って「ファドらしく歌う」ことへのこだわりは棄てて歌ってみた。いつもながら、批判的な感想は耳に入っていない。だからといって、聴いた人が皆、満足して帰っていったとは思わない。

ピアノの伊賀拓郎君は、初めてのファドとの遭遇。もともとジャズ、ラテンを得意とする氏の、そのこだわりのないみずみずしい感性と、蓮見氏のタイミングのいい卓越したギターのアブリガートが、私の歌に今までにない彩りを与えてくれていたことは事実だ。私自身、いままでもない「乗り」のよさに心地よく歌わせてもらい、後口もさわやかだった。

新しい希望をつないでいます」ともありましたネ。

秀子さん、バックがどうあれ、だれであれ、私たちファンは「秀子さんのファド」を聴きたいのです。秀子さんの歌声に魅せられ、夢を見、今はまだ、夢の途中!

秀子さん! 余りがんばらないでね! ファンの誰もが、一日も長く歌いつづけてほしい……。と願っているのですから。「お疲れ様でした。」大成功に終わってホッとしています。私たち、大正のスタッフは、ファド倶楽部に入会し、お手伝いできたことを、心より誇りに思い、ぜひぜひ来年も大正での公演を心待ちにしております。(良子さん、そしてお手伝いくださった大正区の皆様、ありがとうございました。大阪に住んでいる頃には想像だにできなかった大正区でのコンサートでした。皆様のお蔭で、月田はチケット売りの苦勞も、打ち上げの段取りもすることもなく、ひたすら歌うことに没頭できました。制作の野口氏をはじめとする甲子社の皆様にもお世話になりました。来年もまたやろうね! よろしくお祈りします。)

## 「矢田部道一訳詞コンサート」レポート 月田秀子大奮闘！！

byきうびい

4月のある日のこと。「こんなオファーがあるんだけど……どう思う？」と月田嬢がきうびいにやや自信なさげにたずねた。新宿のシャンソニエ「シャンパーニュ」のオーナー、矢田部道一氏が毎年行っている自身の訳詞コンサートの出演依頼である。普段日本語で歌うことの少ない彼女が、多くのシャンソンの訳詞を手がけている矢田部氏の手によってどう変わるのか。このところ定例ライブ活動の状況が変化しているなかで、こうした未知の世界に踏み出す（といっても月田嬢は元シャンソン歌手なのだが）のも彼女にとってきっとよいに違いない、と直感したきうびい、「やってみなよ！」と即答。大変素直な月田嬢はこれまたすぐ「うん、やってみる！」と気持ちよく決定を下したのであった。

皆様おなじみのアマリア・ロドリゲスの名曲「涙」、そして映画「日曜日はだめよ」主題歌の「ビレーの港の男たち」を歌うという。いいじゃないですか。

メリナ・メルクーリ張りのいい女っぷり&ダイナミックな目と口のサイズを誇る月田嬢にはぴったりの曲です。

「ぜひ聴いてみたいな」ときうびいがいうと、「じゃ、荷物持ちで来て！」とこれまた嬉しいオファー。ということで、今回もきうびいコンサートレポート、開始！

13:00 楽屋入り。本日の楽屋は、安奈淳さん・花田和子さんとご一緒。リハーサルは14時からなのだが、月田嬢落ち着いた様子。「ブズーキのチューニングが……」え？ブズーキですと？！！ブズーキとはギリシャの弦楽器。このごろギター弾き語りで頑張っている月田嬢だが、これを弾きながら歌うのか。「ギターとほぼ同じチューニングだし、コード単純だから」……チャレンジャーだ。「でもドレスがねえ……足が出ないか心配なのよ」。なんと、あの石原裕次郎が「俺は待ってるぜー」と波止場のセットで歌うときのポーズと同じように、片足を椅子の上に乗せてブズーキを奏でるのだという

シャンソンコンサートなのに、目立つだろうなあ……14時からのリハーサルが楽しみ。

14:00 リハーサルが始まった。ほかの出演歌手軍はばっちりドレスできめて待っているが、自然体月田秀子はまだ私服のまま。出番が二部のはじめということで多少は時間があつた。ブズーキ奏者の酒井淳氏の到着を待って、リハーサル開始。

第二部で綴帳が上がるとともにいきなりブズーキの音色が響く。出た！おなじみブラックドレスの月田秀子。ややアップテンポで始まった「ビレーの港の男たち」、一番を歌い終わって

やおらブズーキをつかみ、片足を椅子の上に勢よく上げる。うおー、オットコマエー！？だけど準備完了は間奏終了ぎりぎり、大丈夫か？！ぎりぎり間に合い何事もなかったようにブズーキをかき鳴らしながら明るく歌う月田嬢。でもちよーっと歌詞、うるおぼえ？

何度かの繰り返しのあと、「涙」の演奏が始まる。こちらはさすがにいつも歌っているだけあって余裕の出来。日本語詞がつくと、こうも雰囲気変わるのか。うーん、でも、本番、大丈夫かいな……きつと大丈夫さ！

17:00 楽屋で酒井氏ともう一度リハーサル。だんだんいい形になってきた。そこへリハーサルを終えた安奈淳さんが颯爽と楽屋に登場。するとちよっぴり遠慮がちに酒井氏との打ち合わせを終え、合間にきうびいが買いに走ったワインを飲みつつ歌詞を確認する月田嬢。メイクもばっちり、ヘアは本日ナチュラルに。月田秀子緊張の面持ち。

18:30 本番開始。トップバッターの安奈淳さんは、5分足らずで風のように着替え（この素早さはさすがであつた！）クールに楽屋をあとにした。こういうときの一時間というのは、過ぎるのが早い。

19:30 いよいよ月田秀子の出番である 客席から観ていたきうびい。「歌詞間違えるなよー、ブズーキ足にひっかけんじゃないぞー」と思わず手を合わせる もちろん「なんだかんだいっても絶対大丈夫」という気持ちがあつての祈りなのだが。

場内に月田秀子と曲目の紹介のMCが流れた。会場が「どんな歌を歌うのかしら」と興味津々な雰囲気にも包まれた。

酒井氏の安定したブズーキの音色が響き、綴帳が上がる。月田秀子登場。軽快な歌いだし、問題の片足ブズーキ演奏も本番ではタイミングよく準備をし、心配していた美脚はうまくドレスで適度に覆われ、「ブズーキなんていつも弾いているわより」と言わんばかりの余裕の歌いっぷり。矢田部氏による洒落た演出が施された「涙」は、これまた同性からのジェラシーを一気に集めてしまいそうな妖艶さで聴衆を惹きつけた。さすがである。

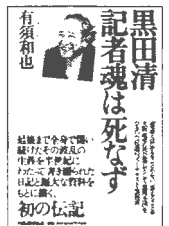
終了して、「こうやって違う世界に入ってみるというのはいい勉強になるわ」と言っていた月田嬢。確かにそうかもしれない。また、あらためて日本語で聴く月田秀子の歌は大変新鮮で、何度もポルトガル語での彼女の歌を聴いて慣れている私でも、やはり「日本語で歌う」という根本的なところでの説得力というのか、理解のしやすさを感じた。

年末全国各地で予定されているコンサートでは、彼女自身がファド数曲を日本語で訳詞して歌うという。こちらも楽しみ！とにかく大奮闘だった月田さん、お疲れ様！！

### ●有須和也著「黒田清 新聞記者魂は死なず」(河出書房新社・1995円) 好評発売中！

「報道とは伝えることやない。訴えることや！」黒田軍団をひきいて庶民の側にたった社会部記者として闘い抜き、ナベツネ体制と真向からぶつかった魂のジャーナリスト黒田清。その誕生から死までの波乱にみちた軌跡を膨大な取材と証言によってたどる渾身にして唯一の伝記。こんな凄い人にファド倶楽部の会長をひきうけてもらっていたのかと、いまさらながら、頭の下がる思いがします。

「歌うとは、訴えたいこと！」



#### <お詫び>

前号50号に、マカオ観光局に対して、誤解を招くような不適切な表現があつたことを、お詫び申し上げます。

マカオは、2005年、8つの広場と22箇所旧宗主国ポルトガルの名残の残る歴史的、宗教的建築物が「マカオ歴史市街地区」として世界文化遺産に登録され、一躍脚光を浴びる街となりました。

マカオへの旅は、私にとって、迫害され、マカオに追放されたキリシタン達の無念の思いを辿る旅でもありました。マカオ観光局は、長い間、日本各地での「マカオの夕べ」のプログラムの中に、一時間ものファドコンサートを組み込んで下さり、マカオにおけるポルトガルの軌跡を辿るお手伝いを、私なりに満身の思いでさせていただいてきました。それができない状況になってしまったことが、月田には悔しく、残念でならない、というのが偽らない思いです。と同時に、マカオの街が、日本に一番近い西洋として、その魅力あふれる姿を、存分に、私たち旅人に提供し続けることを、心から願ってやみません。

# informação

## 年末恒例コンサート決定！！

今回は、アマリア・ロドリゲスの「涙」の作曲家としても有名なポルトガルギターのカルロス・ゴンサルヴェス氏を迎えて、コンサート“FANTASIA DE AMÁLIA”を下記の会場で開催します。追加公演もあるかもしれません。8月中にはチラシがお手元に届くと思っています。今のうちにスケジュールのチェックをお願いいたします。又、ポルトガルギターに興味をお持ちの方のために、カルロス・

ゴンサルヴェス氏のご厚意による本邦初、ポルトガルギターのワークショップも計画しています。

10月29日(日) 静岡・島田「宮美殿」  
 11月1日(水) 新潟「だいしホール」  
 11月3日(金・祝) 大阪・「中ノ島公会堂」  
 11月4日(土) 東京・新橋「ヤクルトホール」  
 11月7日(火) 鹿児島「みなみホール」  
 11月9日(木) 愛知・名古屋「愛知芸術劇場小ホール」

## <月田秀子のスケジュール>

7月 3日(月)	東京・渋谷「マヌエル」 *要予約 開場：18：00 ライブ：20：30～(約1時間)	予約・問合せ：tel/03-5738-0125 料金：6,000円(ディナー・ライブチャージ込み)
4日(火)	東京・四谷「マヌエル」 *要予約	予約・問合せ：tel/03-5276-2432
5日(水)	[NOITE DE SAUDADE Vol.32] 開場：18：00 ①20：30 ②21：30 ③22：30	ライブチャージ：2,500円(入れ替えなし)
12日(水)	東京・新宿「四ツ谷区民ホール」 第27回山本寛之コンサート「ひまわりの咲く頃」 開場：18：00 開演：18：30 ♪昨年に続いて、葛城ユキさん等とゲスト出演、山本寛之氏の作品を2曲歌わせていただきます。	お問合せ：山本寛之事務所 TEL/03-5272-1361 指定席：6,000円 自由席：5,000円
8月 7日(月)	東京・渋谷「マヌエル」 *要予約 開場：18：00 ライブ：20：30～(約1時間)	予約・問合せ：tel/03-5738-0125 料金：6,000円(ディナー・ライブチャージ込み)
8日(火)	東京・四谷「マヌエル」 *要予約	予約・問合せ：tel/03-5276-2432
9日(水)	[NOITE DE SAUDADE Vol.33] 開場：18：00 ①20：30 ②21：30 ③22：30	ライブチャージ：2,500円(入れ替えなし)
9月 4日(月)	東京・渋谷「マヌエル」 *要予約 開場：18：00 ライブ：20：30～(約1時間)	予約・問合せ：tel/03-5738-0125 料金：6,000円(ディナー・ライブチャージ込み)
5日(火)	東京・四谷「マヌエル」 *要予約	予約・問合せ：tel/03-5276-2432
21日(木)	[NOITE DE SAUDADE Vol.34] 開場：18：00 ①20：30 ②21：30 ③22：30	ライブチャージ：2,500円(入れ替えなし)
13日(水)	神戸・三宮「サロン・ド・あいり」 *要予約 開場：18：00 開演：19：00(約1時間)	予約・問合せ：tel/078-241-1898 料金：5,000円(料理・ドリンク付き)
14日(木)	大阪「帝国ホテルチャペルコンサート」 受付：18：30 開演：19：00	予約・問合せ：06-6881-4650 料金：3,500円
16日(土)	山口・徳山「華のうつわ」	予約・問合せ：0833-46-2237(詳細未定)
10月 2日(月)	東京・渋谷「マヌエル」 *要予約 開場：18：00 ライブ：20：30～(約1時間)	予約・問合せ：tel/03-5738-0125 料金：6,000円(ディナー・ライブチャージ込み)
3日(火)	東京・四谷「マヌエル」 *要予約	予約・問合せ：tel/03-5276-2432
4日(水)	[NOITE DE SAUDADE Vol.35] 開場：18：00 ①20：30 ②21：30 ③22：30	ライブチャージ：2,500円(入れ替えなし)
19日(木)	千葉・船橋「きららホール」(船橋市民文化創造館) 「よりみちライブ Vol.36」 開演：①18：30～ ②19：30～(各約20分) ♪お仕事帰りのひとときを、無料ライブでお楽しみ下さい。事前申し込みは必要ありません。	問合せ：047-423-7261
21日(土)	福井「サライ」 *要予約 会費：6,000円(パーティー込)	予約・お問合せ：tel/0776-27-1204
22日(日)	富山 (詳細未定)	お問合せ：076-441-0399(みゃあらく座・真酒亭)



# fados canções

Maria Severa

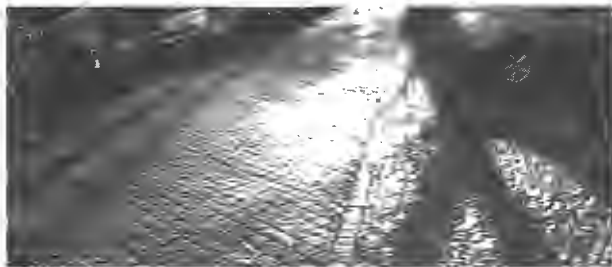
Letra: José Galhardo  
Musica: Raul Ferrão

Num bécó da Mouraria  
Onde a alegria  
Do sol não vem  
Morreu Maria Severa  
Sabem quem era  
Talvez ninguém  
  
Uma voz sentida e quente  
Que hoje á terra disse adeus  
Voz saudosa e voz ausente  
Mas que vive eternamente  
Dentro em nós e junto a Deus  
Além nos céus

Bem longe onde o luar  
O azul tem mais luz  
Eu vejo-a a rezar  
Aos pés duma cruz  
Guitarras trinai  
Viradas p'ro céu  
Fadistas chorai  
Porque ela morreu

Caiu a noite na viela  
Quando o olhar dela  
Deixou de olhar  
Partiu para ser vencida  
Deixando a vida  
Que a fez pensar

Deixou um filho idolatrado  
Que outro afecto igual não tem  
Chama-se ele o triste fado  
Que vai ser deste enfeitado  
Que perdeu o maior bem  
O amor de mãe



## <編集後記>

7月半ばから、ギターを抱えて、九州方面へ出かけることにした。懐かしい顔、初めての顔、そこで新しくファドの土起こし。もう一度、ファドの種を蒔いてみる。七夕どころか、会いたくても会えない人のなんと多いことか。それでも、声援を送りつづけてくださる方々にありがとうございます。ぶつぶつぶやきながら、発送作業。7月23日は黒田清氏の命日そしてアマリア・ロドリゲスの生まれた日。

マリア セヴェラ

訳詩 カウド ヴェルディ

モーラリアの路地  
太陽の輝きも  
届かない所  
マリア セヴェラは死んだ  
彼女が誰なのか  
恐らく 知る人はいない

哀愁と情熱を帯びた声で  
今 この地に別れを告げた  
なつかしい声 今はない声  
けれど 永遠に生き続ける  
私たちの中に 神の御もとに  
空のかなたで

はるか月明かりのあるところ  
空は青く輝きを増す  
私には見える—彼女の祈る姿が  
十字架のキリストの足もとで  
ギターよ 弦を震わせよ  
空に向かって  
ファド歌いたちよ 嘆きの声をあげよ  
彼女が死んだのだから

路地は闇に包まれた  
彼女の瞳が  
閉じられた時に  
苦しみ多き人生を  
終えて  
神に召されていった

一途に愛情をふり注いだ  
息子をひとり残して  
彼の名は“哀しみのファド”  
みなし子として生きていくのだろう  
母の愛という  
かけがえのないものを失くして

## <訳者からひとこと>

マリア セヴェラは売春婦だったこと、貴族と恋に落ちたこと、若くして死んだことなど、椿姫に似ている点がありますね。当時、日本でもそうですが、ヨーロッパでも、兎に角、女性の職業がほとんどなかったのですから、社会的風景が似たものになるのでしょう。“哀しみのファドという名の息子を一人残した”云々の表現が気に入りました。  
[人生は短く、芸術は永し]

月田秀子ファド倶楽部ホームページ  
<http://www.fado.jp/>

■月田秀子ファド倶楽部ジャーナル 第51号  
■2006年7月7日発行(季刊:年4回発行)  
■編集・発行「月田秀子ファド倶楽部」事務局  
■〒108-0075 東京都港区港南1-8-27 日新ビル1406号  
■TEL&FAX 03-3458-9806